



杉田久女句集

北九州市立文学館文庫 ③



杉田久女句集

北九州市立文学館文庫 ③

悼人女

思ひ出—悼人女

一

一

目次

序

高濱 虚子

堺町

大正七年―昭和四年

花衣

昭和四年―昭和十年

菊ヶ丘

昭和十年―昭和二十一年

母久女の思い出

石 昌子

年譜

解説

佐木 隆三

183 180 169

143 83 9 7

花衣

昭和四年より
昭和十年まで

逆潮をのりきる船や瀬戸の春
教へ子に有無を言はせず家の春
春寒の銀屏ひきよせ語りけり
舟に乗りて眺むる橋も春めけり
春浅く火酒したたらす紅茶かな
梨畠の朧をくねる径かな
くぐり見る松が根高し春の雪
岩壁を離れし巨船春の雪
ぬかずいてねぎごと長し花の雨
野々の宮みやを詣でしまひや花の雨

ぬかずきしわれに春光尽天地
春光に躍り出し芽の一系列に
莊守も芝生の春を惜みけり
春惜む布団の上の寝起かな
佇めば春の潮鳴る舳先かな
春潮に流るる藻あり矢の如く
いつとなく解けしともづな纜春の潮
春の山暮れて温泉の灯またたけり
春の襟染めて着初めしこの袷
灌沐の淨法身を拝しける

ぬかずけばわれも善女や仏生会
 無憂華の木蔭はいづこ仏生会
 茸きまつる芽杉かんばし花御堂
 波痕のかはくに間あり大千潟

光子県立小倉高女卒業 三句

靴買うて卒業の子の靴磨く
 卒業やちび靴はくも今日限り
 青き踏む靴新らしき処女ごろ

光子女子美術卒業 一句

卒業の子に電報すよきあした

身の上の相似て親し桜貝
春蘭の咲いてゐたれば木の根攀づ
炊き上げてうすき緑や嫁菜飯
かきわくる砂のぬくみや防風摘む
防^{さきもり}人の妻恋ふ歌や磯菜摘む
元寇の石^{とりで}墨はいづこ磯菜摘む
寇まもる石墨はいづこ磯菜摘む
磯菜つむ行手いそがにいざ子ども
路の臺ふみてゆききや善き隣
甦る春の地靈や路の臺

蘆の芽のひらき初むれば初裕
水上へうつす歩みや濃山吹
百合根分鋤切りし芽を惜しと思ふ
筆とりて門辺の草も摘む気なし
晴天に芽ぐみ来し枝をふれあへる
盆に盛る春菜淡し鶴料理る
鶴料理るまな箸淨くもちひけり
落椿の葉くぐり落ちし日の斑かな
蒼海の波騒ぐ日や丘椿
梅蒼む官舎もありて訪れぬ

花見にも行かずもの憂き結び髪
盛会を祈りて花にゆく遠く
花影あびて群衆遅々とうごくかな
花ふかき館に径ある夜宴かな
花蒼む梢の煙雨ひもすがら
襟巻に花風寒き夕べかな
たもとほる桜月夜や人おそき
神風にこぼれぬ花を見上げけり
故里の藁屋の花をたづねけり
せゝらぎに耳すませ居ぬ山桜

花腐くだつ雨ひねもすよ侘わびごもり
船長の案内くまなし大南風
翠巒を降り消す夕立襲ひ来し
早魃の舗道はふやけ靴のあと
夜毎たく山火もむなしひでり星
汲み濁る家主の井底水飢饉
水飢饉わが井は清く湧き澄めど
夏の海島かと現れて艦遠く
煙あげて塩屋は低し鯉こい幟
大阪の蕘いらかの海や鯉こい幟

目 の 下 の 煙 都 は 冥 し 鯉 幟
男 の 子 う ま ぬ わ れ な り 粽 結 ふ
櫛 卷 の 歌 麿 顔 や 袷 人

ミ シ ン 踏 む 足 の か ろ さ よ 衣 更
蒼 朮^{そうじゆつ} の 煙 賑 は し 梅 雨 の 宿
焚 き や め て 蒼 朮 薫 る 家 の 中
お く れ る し 窓 辺 の 田 植 今 さ か ん
早 苗 水 走 り 流 る 、 籬 に 沿 ひ
お く れ る し 門 辺 の 早 苗 植 え す め り
一 人 寝 の 月 さ へ さ 、 ぬ よ き 蚊 帳 に

踏みならず帰省の靴はハイヒール
寮の娘や帰省近づくペン便り
帰省子の琴のしらべをきく夜かな
帰省子やわがぬぎ衣たゝみ居る
いとし子や帰省の肩に絵具函
帰省子と歩むも久し夜の町
遊園の暗き灯かけに涼みけり
起し絵の御殿葺けたる筧かな
大樹下の夜店明るや地藏盆
涼み舟門司の灯ゆるくあとしざり

羅に衣そ通る月の肌かな
遠泳の子らにつきそひ救助船
潮あびの戻りて夕餉賑かに
潮あびの子ら危険なし旗たて、
上つ瀬の歌劇明りや河鹿きく
水疾し岩にはりつき啼く河鹿
河鹿きく我衣手の露しめり
河鹿なく大堰の水も暮れにけり
病快し河鹿の水をかふるなど
忘れし河鹿の蜘蛛を捜さばや

蛙きく人顔くらく佇めり
蟬涼し長官邸は木がくれに
ひきのこる岩間の潮に海ほうずき
薔薇むしる垣外の子らをとがめまじ
藁づとをほどいて活けし牡丹かな
牡丹を活けておくれし夕餉かな
牡丹やひらきかゝりて花の隈
牡丹や揮毫の書箋そのまゝに
牡丹にあたりのはこべ延ぶがまゝ
牡丹にあたりのはこべ抜きすてし

端居して月の牡丹に風ほのか
隔たれば葉蔭に白し夕牡丹
紅苺垣根してより摘む子来ず
牡丹芥子あせ落つ弁は地に敷けり
凌^{うせ}霄^{せん}花の朱に散り浮く草むらに
流れ去る雲のゆくえや青芭蕉
晴天に広葉をあほつ芭蕉かな
夕顔や遂に無月の雨の音
かへり見ぬ葡萄の蔓も花芽ぐむ
霖雨や泰山木の花墮ちず

活け終へて百合影すめる襖かな
上げ潮にまぶしき芥花あふち棟
籐椅子に看とり疲れや濃紫陽花
窓明けて見渡す山もむら若葉
帰り来て天地明るし四方若葉
新樹濃し日は午に迫る鐘の声
欄涼し鎔炉明りのかの樹立
葉桜や流れ釣なる瀬戸の舟
降り歇まぬ雨雲低し枇杷熟れる
わがもいで愛づる初枇杷葉敷けり

わがもいで贈る初枇杷葉敷けり
手折らんとすれば萱吊ぬけて来し
稻妻に水田はひろく湛えたる
書肆の灯にそゞろ読む書も秋めけり
語りゆく雨月の雨の親子かな
ジム紅茶すゝり冷えたる夜長かな
領^ひ布^れ振^れば隔^たる船や秋曇
掘りかけし土に秋雨降りにけり
ヨットの帆しづかに動く秋の湖
走馬灯灯して売れりわれも買ふ

灯を入れて今宵もたのし走馬灯
走馬灯いつか消えゐて軒ふけし
ころぶして語るも久し走馬灯
岐阜提灯庭石ほのとぬれてあり
一人居の岐阜提灯も灯さざり
星の竹北斗へなびきかはりけり
うち曇る空のいづこに星の恋
板の如き帯にさゝれぬ秋扇
わが描きし秋の扇に匂をしるす
虫をきく月の衣手ほのしめり

籠の虫夜半の豪雨に鳴きすめり
虫籠をしめし歩みぬ萩の露
放されて高音の虫や園の闇
草むらに放ちし虫の高音かな
鳴き出でてくつわは忙し籬かげ
椅子涼し衣そ通る月に身じろがず
月涼しいそしみ綴る蜘蛛の糸
流れ越す水田の月に涼みるし
大波のうねりも去りぬふるせ鯨釣る
鯨釣る和布刈の礁へ下りたてり

野菊むらかゞめば風の強からず
八十の母手まめさよ萩束ね
山萩にふれつゝ来れば座禪石
塀外へあふれ咲く枝や萩の宿
門とざしてあさる仏書や萩の雨
唐もろこしの実の入る頃の秋涼し
唐黍を焼く子の喧嘩きくもいや
不知火の見えぬ芒にうづくまり
戻り来て植ゑし萱草未だ咲かず
佇ちつくすみ幸のあとは草紅葉

大なつめ落す竿なく見上げゐし
人やがて木に登りもぐ棗かな
なつめ盛る古き藍絵のよき小鉢
銀杏の熟れ落つひゞき嵐くるらし
銀杏をひろひ集めぬ黄葉をふみて
旅たのし葉つき橘籠にみたり
蜜柑もぐ心動きて下りたちぬ
掃きよりて木の実拾ひや尉と姥
わけ入りて孤りがたのし椎拾ふ
邸内に祀る祖先や椋拾ふ

門弟をつれて 二句

邸内の木の実の宮に歩みつれ

木の実降るほとりの宮に君とあり

菊花摘む新種の名づけたのまれて

菊摘むや広寿の月といふ新種

菊摘むや群れ伏す花をもたげつゝ

摘み移る日かげあまねし菊畠

摘み移る菊明るさよ籠こにあふれ

添竹をはづし歩むや菊も末

菊干すや東籬の菊も摘みそへて

菊干すや日和つゞきの菊ヶ丘
菊干すや何時まで褪せぬ花の色
日当りてうす紫の菊筵
今日はまた白菊ばかり干しひろげ
縁の日のふたたび嬉し菊日和
朝な朝な掃き出す塵も菊の屑
大輪のかはきおそさよ菊筵
今年ゐて菊咲く頃の我家かな
門辺より咲き伏す菊の小家かな
ひろげ干す菊かんばしく南縁

愛蔵す東籬の詩あり菊枕
 ちなみぬふ陶淵明の菊枕
 白妙の菊の枕をぬひ上げし
 ぬひあげて菊の枕のかほるなり

万葉企救の高浜根上り松次第に煤煙に枯る、一句

冬浜のすゝ枯れ松を惜みけり
 冬凪げる瀬戸の比売宮ふしおがみ
 初凪げる和布刈の磴に下りたてり
 嚴寒や夜の間に萎えし卓の花
 如月の雲嚴めしくラヂオ塔

ほのゆる、閨のとばりは隙間風
眉引も四十路となりし初鏡
たらちねに送る頭巾を縫ひにけり
遊学の旅にゆく娘の布団とぢ
かざす手の珠美しくしや塗火鉢
筆とればわれも王なり塗火鉢
ひとり居も淋しからざる火鉢かな
銀屏の夕べ明りにひそと居し
色褪せしコートなれども好み着る
句会にも着つゝなれにし古コート

アイロンをあて、着なせり古コート
身にまとふ黒きシヨールも古りにけり
鶴鴿に障子洗ひのなほ去らず
かき馴らす塩田ひろし夕千鳥
首に捲く銀狐は愛し手を垂る、
牡蠣舟や障子のひまの雨の橋
君来るや草家の石路も咲き初めて
そののちの旅便りよし石路日和
冬ごもる簷端を雨にとはれけり

茎高くほうけし石落にたもとほり

越ヶ谷付近御獵地 一句

耕人に雁歩むなり禁獵地

英彦山 六句

研して山ほととぎすほしいま、
橡とちの実のつぶて風や豊前坊
六助のさび鉄砲や秋の宮
秋晴や由布にゐ向ふ高嶺茶屋
坊毎に春水はしる笥かな
三山の高嶺づたひや紅葉狩

広寿山の老僧林隆照氏還化 四句

木の 実降る 石に座れば 雲去来
落味 噌や 代替りなる 寺の 厨
桜咲く 広寿の 僧も住み 替り
お茶古 びし花見の 縁も代 替り

馬関春帆楼 三句

薰風や 釣舟絶えず 並びかへ
釣舟の 並びかはりし 籐椅子かな
晚涼や 釣舟並ぶ 楼の前

和布刈の鼻枕潮閣にて 二句

新船卸す瀬戸の春潮とこしなへ
新艘おろす東風の彩旗へんぼんと

タラバ蟹を貰ふ 二句

大釜の湯鳴りたのしみ蟹うでん
大鍋をはみ出す脚よ蟹うでる

或家の初盆に 四句

うつしゑの笑めるが如し魂迎へ
美しき蓮華灯笼も灯を入れる、
玄関を入れるより灯笼灯りゐし
露の灯にまみゆる機なく逝きませり

出生地鹿尾島 五句

朱 樂 咲 く 五 月 と な れ ば 日 の 光 り
 朱 樂 咲 く 五 月 の 空 は 瑠 璃 の ご と
 天 碧 し 盧 橘 は 軒 を う ず め 咲 く
 花 朱 樂 こ ぼ れ 咲 く 戸 に す む 楽 し
 風 か ほ り 香 樂 咲 く 戸 を 訪 ふ は 誰 ぞ
 南 国 の 五 月 は た の し 花 朱 樂

琉球をよめる句 十三句

常 夏 の 碧 き 潮 あ び わ が そ だ つ
 爪 ぐ れ に 指 そ め 交 は し 恋 稚 く

梅檀の花散る那覇に入学す
 島の子と花芭蕉の蜜の甘き吸ふ
 砂糖黍かぢりし頃の童女髪
 榕樹鹿毛飯匙倩捕の子と遊びもつ

(榕樹—熱帯樹にて枝より髭根地に垂る—編者)

ひとでふみ蟹とたはむれ磯あそび
 紫の雲の上なる手毬唄
 海ほうづき口にふくめば潮の香
 海ほうづき流れよる木にひしと生え
 海ほうづき鳴らせば遠し乙女の日

吹き習ふ麦笛の音はおもしろや
潮の香のぐんくかはく貝拾ひ

八幡製鉄所起業祭 三句

かき時雨れ鎔炉は聳^たてり嶺近く
群衆も鎔炉の旗もかき時雨れ
おでん売る夫人の天幕訪ひ寄れる

桜の句

一 延命寺(小倉郊外) 三句

釣舟の漕ぎ現はれし花の上
花の寺登つて海を見しばかり

花の坂船現はれて海蒼し

二 阿部山五重桜(花衣所載)四句

傘をうつ牡丹桜の雫かな
うす墨をふくみてさみし雨の花
雨ふくむ淡墨桜みどりがち
花の坂海現はれて風ぎにけり

三 八幡公会クラブにて 六句

掃きよせてある花屑も貴妃桜
風に落つ揚貴妃桜房のまゝ
花房の吹かれまろべる露台かな

むれ落ちて揚貴妃桜房のまゝ
むれ落ちて揚貴妃桜尚あせず
きざはしを降りる沓なし貴妃桜

花衣時代 一句

春 昼 や 坐 れ ば ね む き 文 机

昭和七年昌子東上 五句

春寒の毛布敷きやる夜汽車かな
いつくしむ雛とも別れ草枕
寮住のさみしき娘かな雛まつる
健やかにまします子娘等の雛祭

寝返りて埃の雛を見やりけり

昌子よりしきりに手紙来る 三句

春愁の子の文長し憂へよむ
望郷の子のおきふしも花の雨
春愁癒えて子よすこやかによく眠れ

蒲生にて 五句

杜若雨に殖えさく高欄に
杜若映れる缸をまたぎけり
柚の花の香をなつかしみ雨やどり
降り出でし缸をかへしぬ杜若

杜若またぐ缸あり見えがくれ

深耶馬溪 六句

大嶺に歩み迫りぬ紅葉狩
 自動車のついて賑はし紅葉狩
 打ちかへす野球のひゞき草紅葉

青の洞門を見て

洞門をうがつ念力短日も
 厳寒ぞ遂にうがちし岩襖
 鋤とれば恩讐親し法の秋

洞門をうがちし僧禪海の像及び碑が青の洞門の入口にある。人間の一心は遂に何事も成就するといふ事を感じせらる。

鶴の句

一 鶴を見にゆく

月高し遠の稲城はうす霧らひ
並びたつ稲城の影や山の月
鶴舞ふや日は金色の雲を得て
山冷にはや炬燵して鶴の宿
松葉焚くけふ始ごと暖炉かな
燃え上る松葉明りの初暖炉
ストーヴに椅子ひきよせて読む書かな

横顔や暖炉明りに何思ふ
投げ入れし松葉けぶりて暖炉燃ゆ
菊白しピアノにうつる我起居
霜晴の松葉掃きよせ焚きにけり
向う山舞ひ翔つ鶴の声すめり
舞ひ下りてこのもかもの鶴啼けり
月光に舞ひすむ鶴を軒高く

二 孤鶴群鶴

暁の田鶴啼きわたる軒端かな
寄り添ひて野鶴はくろし草紅葉

畔移る孤鶴はあはれ寄り添はず
雛鶴に親鶴何をついばめる
ふり仰ぐ空の青さや鶴渡る
子を連れて落穂拾ひの鶴の群
鶴遊ぶこのもかもの稲城かげ
遠くにも歩み現はれ田鶴の群
畔ぬくし静かに移る鶴の群
一群の田鶴舞ひ下りる刈田かな
鶴の群屋根に稲城にかけ過ぐる
一群の田鶴舞ひすめる山田かな

親鶴に従ふ雛のやさしけれ
鶴の影ひらめく畔を我行けり
好晴や鶴の舞ひ澄む稻城かげ
群鶴の影舞ひ移る山田かな
鶴の影舞ひ下りる時大いなる
遠くにも群鶴うつる田の面かな
舞ひ下りる鶴の影あり稻城晴
枯草に舞ひたつ鶴の翅づくろひ
歩み寄るわれに群鶴舞ひたてり
大嶺にこだます鶴の声すめり

近づけば野鶴も移る刈田かな
群鶴を驚かしたるわが歩み
翅ばたいて群鶴さつと舞ひたてり
大空に舞ひ別れたる鶴もあり
三羽鶴舞ひ澄む空を眺めけり
学童の会釈優しく草紅葉
冬晴の雲井はるかに田鶴まへり
旅籠屋はたごの背戸やにも下りぬ鶴の群
舞ひ下りて田の面の田鶴は啼きかはし
彼方より舞ひ来る田鶴の声すめり

軒高く舞ひ過ぐ田鶴をふり仰ぎ
啼き過ぐる簷端の田鶴に月淡く
田鶴舞ふや稻城の霜のけさ白く
田鶴舞ふや日輪峰に登りくる
鶴なくと起き出しわれに露台の旭
鶴舞ふや稻城があぐる霜けむり
鶴鳴いて郵便局も菊日和
家毎に咲いて明るし小菊むら
鶴の里菊咲かぬ戸はあらざりし
稻城かげ遊べる鶴に歩み寄り

好晴や田鶴啼きわたる小田のかげ
 舞ひあがる翅ばたき強し田鶴百羽
 鶴の群驚ろかさじと稲架かげに
 近づけば舞ひたつ田鶴の羽音かな
 この里の野鶴はくろし群れ遊ぶ

水郷遠賀 十一句

萍の遠賀の水路は縦横に
 菱の花咲き閉づ江沿ひ匂帳手に
 菱刈ると遠賀の乙女ら裳を濡すも
 菱の花引けば水垂る長根かな

水ぬるむ巻葉の紐の長かりし
 水底に映れる影もぬるむなり
 青すゝき傘にかきわけゆけどゆけど
 泳ぎ子に遠賀は潮を上げ来り
 千々にちる蓮華の風に佇めり
 藻塩焚く遠賀の港の夕けむり
 もてなしの蓮華飯などねもごろに

企救の紫池にて 三句ならびに五句

豊国の企救の池なる菱のうれをつむとや妹が御袖ぬれけむ

万葉集豊前国白水郎歌

菱摘みし水江やいづこ嫁菜摘む

万葉の池今狭し桜影

池の伝説

夕づゝに這ひ出し蛙みな啞と
 摘み競ふ企救の嫁菜は籠にみてり
 嫁菜つみ夕づく馬車を待たせつゝ
 里人の茅の輪くぐりに従はず
 一人強し夜の茅の輪をくぐるわれ
 万葉の菱の咲きとづ江添ひかな

水郷遠賀 三句

菱実る遠賀の水路は縦横に

菱採ると遠賀の娘子裳濡ずも

菱摘むとかゞめば沼は沸く匂ひ

遠賀川 十一句

菱蒸す遠賀の茶店に来馴れたり

すぐろなる遠賀の萱路をただひとり

生ひそめし水草の波梳き来たり

添ひ下る塙おの運河はぬるみけり

土堤長し萱の走り火ひもすがら

風さそふ遠賀の萱むら焰ほ鳴りつゝ

蘆むらを焼く火はかなく消えにけり

焰迫れば草薙ぐ鎌よ野焼守
 もえ迫る野焼の草を薙ぎ払ひ
 蘆の火の燃えひろがりて消えにけり
 蘆の火に天帝雨を降くだしけり
 蘆の火の消えてはかなしざんざ降り

昭和八年光子東上 三句

子のたちしあとの淋しさ土筆摘む
 降り出でし傘のつぶやき松露とる
 娘がゐねば夕餉もひとり花の雨

*

宇佐桜花祭 三句

うらゝかや朱のきざはしみくじ鳩
 三宮を賽しおはんぬ桜人
 桜咲く宇佐の呉橋うち渡り

宇佐神宮 五句

うらゝかや齋いっき祀れる瓊たまの帯
 藤挿頭かざす宇佐の女にょ禰宜は今在さず
 丹の欄にさへづる鳥も惜春譜
 雉子鳴くや宇佐の盤境いわ禰宜ひとり
 春惜む納蘇利の面めんは青丹さび

昌子帰省 二句

元旦の阜頭に瀬戸の舟つけり
北風寒き阜頭に吾子の舟つけり

花の旅 六句

まだ散らぬ帝都の花を見に来り

茅舎庵

訪れて暮春の縁にあるころ

鎌倉虚子庵

虚子留守の鎌倉に来て春惜む

*

由比ヶ浜

身の上の相似でうれし桜貝
種浸す大盥にも花散らす

茅舎庵

水そゝぐ姫龍胆に暇乞ひ

横浜外人墓地 一句

ばら薫るマーブルの碑に哀詩あり

筑前大島 十二句

大島の港はくらし夜光虫
濤青く藻に打ち上げし夜光虫

足もとに走せよる潮も夜光虫
 夜光虫古鏡の如く漂へる
 海^み松^るかけし蟹の戸ほそも星祭

大島星の宮吟詠

下りたちて天の河原に櫛梳り
 彦星の祠は愛しなの木蔭
 口すぐ天の真名井は葛がくれ

玄海灘一望の中にあり

荒れ初めし社前の灘や星祀る
 大波のうねりもやみぬ沖脛

星の衣きぬ吊すもあはれ島の娘ら

星の衣は七夕の五色の紙を衣の形に
切り願事をして笹に吊すもの

乗りすゝむ舳にこそ騒げ月の潮

母の句 五句

八十の母てまめさよ雛づくり
 母淋しつくりためたる押絵雛
 娘をたよる八十路の母よ雛作り
 扶助料のありて長寿や置炬燵
 雛つくる老のかごとも慰めり

*

出雲旅行 四十三句

一 出雲御本社

水手洗の杓の柄青し初詣
雪解の雫ひまなし初詣
仰ぎ見る大ノ飾出雲さび
巨いさや雀の出入るノ飾
神前に遊ぶ雀も出雲がほ
椿落ちず神代に還る心なし
斐伊川のつゝみの蘆芽雪残る

斐伊川のつゝ、みの蘆芽萌え初めし

二 宍道湖（松江大橋）

蘆芽ぐむ古江の橋をわたりけり
蘆の芽に上げ潮ぬるみ満ち来たり
上げ潮におさるゝ雑魚蘆の角
若蘆にうたかた堰を逆ながれ

三 美保関に向ふ途中

目の下に霞み初めたる湖上かな
立春の輝く潮に船行けり
春潮の上には大山雲をかつぎ

若布刈干す美保関へと船つけり

四 日の見磯に至る途上風景絶好

群岩に上るしぶきも春めけり

潮碧しわかめ刈る舟木の葉の如し

五 出雲神話をよめる。稻佐の浜

群岩に春潮しぶき鰐いかる

虚偽の兎神も援けず東風つよし

春潮の渚に神の国譲り

稻佐の浜国譲りの故事—高天原から天孫降臨の為、この浜で出雲族と国譲りの議について神々相会し、遂に乱を好まぬ大國主命は賢明にも国土を全部献上。その為、天照大神大いに喜び給ひ、御子を出雲につかはし、大國主の宮を造営して仕へせしめ給ふとある。

椿咲く絶壁の底潮碧く
春潮に真砂ま白し神ぞ逢ふ
春潮からし虚偽のむくい泣く兎
潮浴びて泣き出す兎赤裸
兎かなし蒲の穂絮の甲斐もなく
春潮に神も怒れり虚偽兎
春寒し見離されたる雪兎
ゆるゆると登れば成就椿坂
雪兎援けず潮にわがそだつ

六 小泉八雲の旧居

春寒み八雲旧居は見ずしまひ
灯台のまたたき滋し壺焼屋

七 出雲御本社宝物

春光や塗美しき玉櫛篋

八 八重垣神社

処女美^{うま}し連理の椿髪に挿^か頭^ざし

九 境内に鏡の池

みづら結ふ神代の春の水鏡
日表の蒼も堅しこの椿

椿濃し神代の春の御姿
春の旅子らの縁もいそぐまじ

十 出雲八重垣

神代より変らぬ道ぞ紅椿
節分の丑満詣降られずに
東風吹くや八重垣なせる旧家の門と
暖房に汗ばむ夜汽車神詣

筑紫観世音寺三句外九句

さゝげもつ菊みそなはせ観世音
菊の香のくらき仏に灯を献ず

月光にこだます鐘をつきにけり
かゞみ折る野菊つゆけし都府楼址
道ひろし野菊もつまず歩みけり
こもり居の門辺の菊も時雨さび
菊の簇れ落葉をかぶり乱れ伏す
簇れ伏して露いつぱいの小菊かな
遂にこぬ晩餐菊にはじめけり
菊根分誰ぞわが鋺を使ひ失す
菊の根に降りこぼれ敷く松葉かな
日の菊に雫振り梳く濡毛かな

飛鳥みち

稲架の飛鳥みちなり語りつゝ

大和橘寺の鐘樓所見

つらね干す簷の橘まだ青く

国宝信貴山縁起絵巻源氏車争之図

争へる牛車も人も春霞

清朝翡翠香炉

春怨の麗妃が焚ける香煙はも

抱一四季花鳥絵巻極彩色

花鳥美し葡萄はうるみ菖蒲濃く

旅かなし 九句

歎むまじき藤の雨なり旅疲れ
蕨餅たうべ乍らの雨宿り

くちすゝぐ古き井筒のゆすら梅
わが袖にまつはる鹿も竹柏の雨
公園の馬酔木愛しく頬にふれ
拝殿の下に生れるし子鹿かな
鹿の子の生れて間なき背の斑かな
旅かなし馬酔木の雨にはぐれ鹿
旅衣春ゆく雨にぬるゝまゝ

表記について

本書は、『杉田久女句集』（角川書店 一九五二年一月二〇日）を底本として使用し、原則として、句は旧仮名づかいを残し、その他は新字体、新仮名づかいに改めました。

なお、本作品中、今日の観点からすれば差別等にかかわる不適当な表現があります。作品自体の持つ文学性、芸術性と時代的背景、及び著者が故人であることを考慮してそのままとしました。

（北九州市立文学館）

北九州市立文学館文庫(3)

平成20年1月21日第1刷発行

平成21年3月31日第2刷発行

著者 杉田久女

発行 北九州市立文学館

〒803-0813 北九州市小倉北区城内4-1

Tel (093)571-1505

Fax (093)571-1525

印刷 株式会社ゼンリンプリンテックス

北九州市立文学館文庫③



Kitakyushu
Literature Museum